

怖れないこと、捨てること 廣瀬直人

俳句の作り方は一人一人異なるはずである。ただ、ごく一般的に見ると、句会や雑誌などで、いい言葉やうまい言い回しなどに接するとそれを自分の句に取り込んでくる人がいるかと思うと、一方には、そういうことに極度に神経を使っている人もいる。いずれにしても、どちらにも一生懸命の気持ちが見える場面では、単純に良いとか悪いとか、またそんなに気にしなさんなどは言いきれないでいることも多い。こうした傾向は、初心者の場合は、その人が意識して人の句を真似しない限り、それほど気を回すこともないが、作句のキャリアが五年とか六年とかいうように年を重ねるにつれて多くなってくる。つまり、作るこつがある程度わかってくると感心して読んだ表現が、いつか意識の中に入り込んでいて、それがあつた時ふつと表面に出てくることがある。そ

の極端の場合は、そっくりそのままの句になってしまうことである。しかし、こういうことを繰り返しながら、その人自身のものが醸成されてくる面もあるから、あまり、類想だとか類句だとか言い立てるとかえって作れなくなるのではという気掛りもある。

また、句会の一人一人を見ていると、その当人は気付いていなくても、もともと類想を生みにくい感受の質を持っている人もあるし、一方には、微妙なところで、類想と類句のあわいを切り抜けながら、自分のものはしっかりと守っている人もある。総じて、前者の場合は、一句一句の出来不出来の波があつて、特に表現のバランスを失っていることが多い。後者の場合は、それほど失敗作もない代わりにこれはと思わず目を瞞らせる作品に接することが少ない。いずれにしても、その人その人の持ち味として見るほかはないが、ここで対象になつてい

る、あなた中級ねと言われるレベルになると、必ずその人なりのぶつつかるべき関所はこの辺りにあるようだ。ただ、忘れてならないのは、作ることを誠実にという通行手形の所持である。

ところで、芭蕉にこんな句がある。

憂きわれを寂しがらせよ秋の寺

憂き我をさびしがらせよ閑古鳥

もし、この二句が別々の人の作であつたら、それぞれその話題になるのだが、同じ作者だから、それぞれの発想の内面に鑑賞の焦点は絞られることになる。「秋の寺」の方は、「おくのほそ道」の旅のあと、同行した曾良の叔父の寺、大智院に泊した折の作、「閑古鳥」の方は、それから二年後の元禄四年、京都の嵯峨野に滞在中の作である。「われ」と「我」、「寂し」と「さびし」の違いにも当然作者の意図は潜んでいようが、それはともかくとして、大きな違いは、「秋の寺」と「閑古鳥」という季語の用法である。鑑賞の主眼は何と言つても、中の句の呼びかけの相手は何かということになる。つまり、前者は「秋の寺」とは言っているが、明らかにその寺の住職に向けられたあいさつの心が見える。それに比べて後者の呼びかけは「閑古鳥」である。広げて解すれば、ここに住む去来などに寄せる気持ちもあろうが、それは

あいさつというよりも、自然の閑寂境に融け込もうとする心境がより鮮やかである。

こうして、季語の違いや作られた場面の違いを読みとっていくと、類想が類句かの接点はいつも微妙に揺れ動いていると言つていい。ただ、作者が同一の場合は、何年かの時を経ていても、前句の推敲という見方もなくはないが、この両句については、それぞれの作句契機から見て独立の作品として考えるのが至当であろう。おそらく作者の芭蕉自身にも、蕉風円熟の期を背景にしながら類似の作という意識などなかったのではなからうか。

とにかく、類想、類句のけじめをどこに置くにしても、これを避ける方法が、もしあるとしたら、多作多捨の作句の基本に立ち戻ることをあらためて考えたい。中級あるいはそれ以上のレベルになれば、もうかなりの人様の句に接してきているはずだから、この発想、この言葉、あるいはこの言い回しなどどこかにあったかもしれないという感触があつたら、未練なく捨てるべきよさが必要であろう。類想、類句を怖がって、必要以上に神経質になることは禁物、ただ、それが、思い切りよく捨てるべきよさと表裏するものだという認識は持つていたい。